

# 小・中学校女性教員のストレス反応に及ぼす職務・ケア役割ストレス、性役割観、被援助志向性の影響

学校教育学専攻  
学校心理学コース  
M10030J  
兼重喜美子

## 問題と目的

教育の専門的な担い手である教師の発達に注目したときに、教師のストレスやバーンアウトの問題が看過できないものとなる(今津, 1996)。

教員のバーンアウト規定要因は、様々な研究があるが、女性教員の方が男性教員よりもストレスが高いことは以前から指摘されており(宗像ら, 1988)、出産や家事などを抱える女性教員の負担が大きい要因を検討する必要があると指摘されている(田中・高木, 2008)。また、従来の教師のストレス研究から生活ストレスも含めた本来の教師ストレス研究への転換の必要も指摘されている(西坂, 2003)。

そこで本研究では、ケア役割を「子育てや介護、家事などを通して家庭・家族を維持し養育し世話する世代継承性をもつ役割」と定義する。そして生活ストレスであるケア役割ストレスと職務ストレスやストレス反応との関連を探ることを第1の目的とする。さらに、職務ストレス、ケア役割ストレス、ストレス反応、それを調整すると思われる社会的性役割観、被援助志向性の影響過程を探ることが第2の目的である。

## 研究1

1. 目的：ケア役割を担う女性教員のケア役割ストレス尺度を作成する。

### 2. 予備調査

#### 1) 方法

(1)調査対象者：H大学に在籍する現職教員とY県の現職教員23名(男性7名、女性16名)

(2)調査時期：2011年2月10日

(3)調査内容：ケア役割の教職に及ぼす影響や、教職のケア役割に及ぼすについての自由記述

(4)調査手続き：該当する項目への回答を予備調査票に記入して郵送することにより実施した。

### 2) 結果及び考察

ケア役割ストレスとして予想していた因子に相当する項目29項目に、石原ら(1999)の家族生活ストレス尺度から5項目追加し、合計34項目のケア役割ストレス尺度を作成した。

## 3. 本調査

### 1) 方法

(1)調査対象者：1都5県の小・中学校の現場の女性教員171名

(2)調査時期：2011年7月上旬から下旬

(3)調査内容：フェイスシートとケア役割ストレス尺度(全34項目)

(4)調査手続き：質問紙は無記名、教員による自記式で返信用封筒での郵送法で回収した。

### 2) 結果及び考察

最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、解釈可能な5因子(「子育てにまつわること」 $\alpha=.91$ 、「家事に関すること」 $\alpha=.88$ 、「教職に対する家族の理解不足」 $\alpha=.87$ 、「家族の介護や健康の心配」 $\alpha=.80$ 、「家庭内人間関係」 $\alpha=.71$ 。)が抽出された。

石原ら(1999)の1因子構造であった尺度に教職にある故に生じる負担を加え5因子構造に分化させたものであることが判明した。したがって女性教員の生活ストレスであるケア役

割ストレス尺度を開発できたと考えられる。

## 研究 2

1. 目的: ケア役割ストレス尺度と他の 2 尺度(職務ストレス尺度, ストレス反応尺度)と被験者の属性(年齢, 校種, 婚姻, 配偶者の職業, 末子年齢, 要介護者の人数, 世帯構成)の関連を検討する。

### 2. 方法

1) 調査用質問紙: 研究 1 で作成したケア役割ストレス尺度に 2 尺度(職務ストレス尺度, ストレス反応尺度)を加えて作成した。

#### 2) 本調査の実施

(1) 調査対象者: 1 都 5 県の小・中学校の現場の女性教員 171 名

(2) 調査時期: 2011 年 7 月上旬から下旬

(3) 調査内容: フェイスシート, ケア役割ストレス・職務ストレス・ストレス反応・被援助志向性・社会的性役割観尺度

(3) 調査手続き: 質問紙は無記名, 教員による自記式で返信用封筒での郵送法で回収した。

### 3. 結果及び考察

すべての属性について, ケア役割ストレス, 職務ストレス, ストレス反応各下位尺度との有意な関連が見出された。中でも末子年齢や要介護者の人数, 世帯構成はケア役割ストレスとの関連性が高かった。

## 研究 3

1. 目的: ケア役割を担う女性教員のストレス関連要因の影響過程を検討し, ストレス・モデルを検証する。

### 2. 方法

#### 1) ケア役割を担う女性教員のストレスの仮説モデル

職務ストレスにケア役割ストレスが影響を与え, ストレス反応にはそれぞれが影響を及ぼすというプロセスを基本とする。加えて社会的性役割観, 被援助志向性も影響を与えるというストレス・モデルを構成した。

## 2) 使用尺度

①被援助志向性尺度

②社会的性役割観尺度

## 3. 結果及び考察

ケア役割を担う女性教員の職務負担を家庭役割負担が高めていた。また, ケア役割を担う女性教員は, 職務, 家庭役割双方からの多くのストレスがストレス反応に何重にも重なっていた。女性が男性の家事・育児参加意識や援助の欲求を持つことは, ケア役割ストレスやストレス反応を高めることにつながった。反対に, 被援助への抵抗感の低さは幾つものケア役割ストレスやストレス反応を低減した。

以上のことから仮説モデルの影響過程は, ほぼ確認できたが, 社会的性役割観や被援助志向性の影響過程に一部仮説と異なるところも見られた。

## 総合考察

女性教員の置かれている立場は男性教員以上に負担が大きい。よって, 職場や家庭で属性に配慮して負担を軽減する働きかけや援助を提供する姿勢が必要である。一方, 女性教員自身も家事能力の向上や援助への欲求をもたない態度が望まれる。

## 今後の課題

- ・ 共分散構造分析による包括的なモデルの検証が必要である。
- ・ ケア役割を担う女性教員用のソーシャル・サポート尺度が必要である。
- ・ 女性教員間の属性の状況による比較検討を行う必要がある。
- ・ 男性との比較研究をする。

主任指導教員 浅川 潔司  
指導教員 藤原 忠雄